W. Wordsworth の「茨」－想像力による劇化への試み

野 口 忠 男

目 次

1. はじめに
2. 伝承バラッドと「茨」
3. 「茨」の形成と想像力
4. 劇化への試み
5. おわりに

1. はじめに

Wordsworth の「茨」は，読む者の想像力を大いにかき立て，不安と恐怖を引き起こす想像の世界へといざないカタルシスを可能にしてくれる。しかしそれは明確なヴィジョン[(1)]を提示してくれるというよりもどこかあいまいで不透明な詩空間を抱かせる感がある。私たちは確かに Martha Ray の悲劇として読むこともできるし，あるいは語り手の迷信深い性格の露呈として読むこともできる[(2)]。本論では詩人 Wordsworth 自身が，激しい風雨の日に老いた茨の木に強い感動を覚える場面を，この詩が生まれる純粋な詩的経験の萌芽であると目したい。これを中核として詩人の想像力が働き，語り手を通して詩が劇的に形成されていく。つまりこの作品を創造の視点に立ち，詩が生まれる過程をたどりながら読む時，Wordsworth が，純粋な詩的経験を自ら語らないで，それを語りの手法を用いて表現し，暗示性に富む詩空間を形成した意味が見えてくるのである。

2. 伝承バラッドと「茨」

Wordsworth が「茨」を制作した時，バラッド "The Cruel Mother"「残酷な母[(3)]」を元歌として使用したことは明らかである。ここでは Hutchinson が指摘している Scott's Minstrelsy を用いて，伝統的なバラッドにおける語りを中心に考えてみたい。

She sat down below a thorn,
  Fine flowers in the valley
And there she has her sweet babe born.
  And the green leaves they grow rarely

  'Smile na sae sweet, my bonie babe,

And ye smile sae sweet, ye'll smile me dead.'

She's taen out her little pen-knife,
And twinnd the sweet babe o its life.

She's howket a grave by the light o the moon,
And there she's buried her sweet babe in.

As she was going to the church,
She saw a sweet babe in the porch.

'O sweet babe, and thou were mine,
I wad cleed thee in the silk to fine.'

'O mother dear, when I was thine,
You did na prove to me sae kind.'(4)

彼女は茨の木のもとにすわった,
　谷間には美しい花が咲き
そこで彼女は可愛い子供を生んだ。
　緑の草がとても美しくはえている。

「そんなににこにこ笑わないで，可愛い子供,
お前が笑うと私も笑ってしまうでしょう。」

彼女は小さなペンナイフを取り出すと
可愛い赤子の命を奪った。

彼女は月の明かりで墓を掘り,
そこに可愛い赤子をうめた。

彼女が教会へ行くと
可愛い赤子が入り口にいるのが見えた。

おお可愛い子供よ，お前は私のものでした。
きめ細かい絹にお前をつつんであげましょう。

「ああ　お母さん，私があなたの赤子の時,
あなたは私を大切にしてくれなかった。」

このバラッドには，Wordsworth の「茨」の中で語られる主要なモチーフがほとんど全て含まれている。つまり茨の木と母親の嬰児殺しと村の教会である。「茨」においては明示されていない嬰児殺しの方法が，バラッドではペンナイフを用いての殺害と明記されている。バラッドの語り手は，この残酷な物語を読み人知らずの存在として淡々と客観的に語っている。藪下卓郎氏は「バラッドにおける物語り技法」において，『バビーロン』(*Babylon*) の説明の箇所で次のように有意義な見解を述べている。

……このバラッドの技法面で印象的なのは，事件のもっとも危機的な場面のみが取り扱われているという点と，その場面の展開が人物の対話と動きの規則的なパターンの繰返しのうちになされている点である。しかも事件が残酷なのに比して，その語りくちは無表情で，淡々としている。(5)

「残酷な母」に関してもこれとほとんど同様のことが考えられる。

Wordsworth は，純粋な詩的経験を詩に結晶化する方法として，「残酷な母」を骨組みとして使用し，その際バラッドの語りの手法を詩人特有のやり方で取り入れ，経験の抒情的劇化を試みていると言える。

3. 「茨」の形成と想像力

Wordsworth が茨の木に強烈な印象を受けたのは，1778年3月19日であった。

March 19th. Wm. and Basil and I walked to the hill-tops, a very cold bleak day. We were met on our return by a severe hailstorm. William wrote some lines describing a stunted thorn.(6)

3月19日　ウィリアムとバジルと私は，丘の頂上まで歩いた。とても寒く陰気な日だった。帰り路霰まじりの激しい嵐に襲われた。ウィリアムはねじまがった茨の木を描写する数行を書いた。

詩人は，この Quantock Hill での茨について穏やかなよく晴れた日には，気づかないで通り過ぎていたが，嵐のために強烈な印象を与えられた経験を次のように語る。

Alfoxden. 1798. Arose out of my observing, on the ridge of Quantock Hill, on a stormy day, a thorn which I had often passed in calm and bright weather without noticing it. I said to myself, 'Cannot I by some invention do as much to make this Thorn permanently an impressive object as the storm has made it to my eyes at this moment ?' I began the poem accordingly, and composed it with great rapidity.(7)

オルフォクスデン。1798年。クォントック　ヒルの峯で，ある嵐の日に，以前にもしばしば通り過ぎながら，静かな晴れた日には気づかなかった茨の木を見て生まれたものだった。

「なんとか工夫をこらして，今嵐のために私の目に見えているのと同じように，この茨の木を永久に印象を与えてくれるものにすることはかなわないものだろうか」と私は自問した。そしてこの詩を書き始め，大変な速さで完成させた。

ここにはWordsworthの心の中で詩が芽生え，形成される様子が語られている。重要なことは，不断は気づかずに通り過ぎた茨の木が，激しい嵐のために意味ある存在としての姿を呈し，詩人の鋭い感性に電撃的に反応したことである。よく知られていることであるが，Wordsworthの場合，激しい風が詩的感興をよびおこす霊的な力となり，詩創造の根源的な要因として働くのである。例えば "I wandered lonely as a cloud" において，原体験となったものは，アルズウォーター湖畔で嵐気味の強風が吹く日に，水仙の大群を見た体験が，詩創造の機縁を詩人に与えたのである。

Wordsworthは，1798年版の *Lyrical Ballads* の序文で作品の実験的な試みと詩の言語について，興味深い考えを述べている。

> The majority of the following poems are to be considered as experiments. They were written chiefly with a view to ascertain how far the language of conversation in the middle and lower classes of society is adapted to the purposes of poetic pleasure.[8]

> ここに含まれた詩の多くは，実験的な作品として考えられるものである。これらの作品が書かれたのは，中産階級と下層階級の人々の話す言語が，どの程度まで詩的快感の目的に適うかを主に確かめるためである。

彼は「茨」を最も典型的な実験作品の一つと考え，「永久に印象を与えてくれるもの」にするために，工夫をこらすことを意図している。最も重要な工夫の一つが，作者が直接語るのではなく，作者に代わる架空の語り手を登場させることであった。詩人はいかなる語り手を想定した方がこの詩に最適であるかを考え，1800年版の *Lyrical Ballads* の序文で次のような人物のことを述べている。

> ... a Captain of a small trading vessel, for example, who being past the middle age of life, had retired upon an annuity or small independent income to some village or country town of which he was not a native, or in which he had not been accustomed to live. Such men, having little to do, become credulous and talkative from indolence; and from the same cause, and other predisposing causes by which it is probable that such men may have been affected, they are prone to superstition. On which account it appeared to me proper to select a character like this to exhibit some of the general laws by which superstition acts upon the mind. Superstitious men are almost always men of slow faculties and deep feelings; their minds are not loose, but adhesive; they have a reasonable share of imagination, by which word I mean the faculty which produces impressive effects out of simple elements; but they are utterly destitute of fancy, the power by which pleasure and surprise are excited by sudden varieties of situation and an accumulated imagery.[9]

……例えば，小さな商船の船長のような人で，中年を過ぎて引退し，知らない土地あるいは住み慣れぬ町村へ行って，年金あるいは少ない収入で生活している。そういう人はほとんどする事もなく，無為な生活をしているために信じやすくおしゃべりになり，また同じ理由からあるいは影響されやすいという理由から，迷信を信じやすくなる。このために，迷信が精神に作用する一般的な法則のいくつかを示すのに，この種の人物を選ぶのが適しいと思える。迷信深い人々は常時頭の働きが遅いが，豊かな感情を持っている。彼らの精神は散漫なのではなく，ねばり強いのである。彼らはほどよく想像力が与えられている。この想像力ということばの意味は，単純な要素から印象深い効果を生み出す能力のことである。しかし，彼らは，突然の場面変化と積み重ねられた心象によって喜びや驚きが引き起こされる力である空想力についてはまったく貧弱である。

詩人は「迷信が精神に作用する一般的な法則のいくつかを示す」ために，迷信深い人物を選び，どの程度想像力が働くかを実験しているのである。詩人が験者で語り手は被験者なのである。Wordsworth は，想像力を「単純な要素から印象深い効果を生み出す能力」と捕らえ，1802年の序文では

... a certain colouring of imagination, whereby ordinary things should be presented to the mind in an unusual way[10]

……日常の事物が異常な形で精神に提示される，想像力のある彩色の働き

と述べられ，1815年の序文では次のように語られている。

Imagination, ..., has no reference to images that are merely a faithful copy, existing in the mind, of absent external objects; but is a word of higher import, denoting operations of the mind upon those objects, and processes of creation or of composition, governed by certain fixed laws.[11]

想像力は，心の中に存在していて，外の事物としては存在しないものをただ忠実に写す心象とは関係がない。それはもっと高遠な意味を有する言葉であり，外の事物に対する精神の作用を示し，ある定められた法則によって支配される創造過程あるいは創作過程を表わすものである。

Wordsworth にとって想像力は，外の事物と内の心象を変容し，詩創造の過程に参与する偉大な精神の働きである。James A. W. Heffernan は，Wordsworth の想像力に関し示唆に豊む言葉を述べている。

For Wordsworth, imagination is a power that acts upon the objects of the visible world. Once set in motion by creative sensibility, it behaves like a natural force, dominating the universe by transforming its sights and sounds. As mist converts a rolling

landscape into a ghostly sea, the imagination turns the call of a cuckoo into a voice of mystery. It transfigures the world, investing natural phenomena with an almost supernatural phosphorescence.[12]

ワーズワスにとって，想像力とはこの目に見える物質世界の事物に作用する力である。想像的な感性が働き，想像力がひとたび動き出すと，それは見えたり聞こえたりするものを変容することによって，宇宙を支配しようとする。霧がゆるやかな起伏の光景を幻想の海へと変えるように，想像力はかっこう鳥の鳴き声を神秘な声へと変容させる。想像力は自然現象を超自然の燐光でつつみながら，世界を変容させる。

さらに Heffernan は，「ワーズワスの想像力の変容する力への信念が，彼の詩の理論の中核をなしている」"Wordsworth's belief in the transforming power of imagination is central to his theory of poetry."[13] と想像力の変容性を重視している。「茨」を想像力の作用から考察するとき，ガストン・バシュラールの想像力説は傾聴に値するものである。

いまでも人々は想像力とはイメージを形成する能力だとしている。ところが想像力とはむしろ知覚によって提供されたイメージを歪形する能力であり，それはわけても基本的イメージからわれわれを解放し，イメージを変える能力なのだ。イメージの変化，イメージの思いがけない結合がなければ，想像力はなく，想像するという行動はない。もしも眼前にある或るイメージがそこにないイメージを考えさせなければ，もしもきっかけとなる或るイメージが逃れてゆく夥しいイメージを，イメージの爆発を決定しなければ，想像力はない。知覚があり，或る知覚の追憶，慣れ親しんだ記憶，色彩や形体の習慣がある。想像力 imagination に対する語は，イメージ image ではなく，想像的なもの imaginaire である。或るイメージの価値は想像的なものの後光の広がりによって測られる。想像的なもののおかげで，想像力は本質的に開かれたもの，のがれやすいものである。人間の心象(プシシスム) psychisme においては，想像力とはまさに開示の経験であり，新しさの経験に他ならぬ。他のいかなる性能よりも想像力は人間の心理現象を特徴づける。ブレイクが明言しているとおり≪想像力は状態ではなく人間の生存(エグジスタンス)そのものである[14]≫。

バシュラールの想像力に関する見解は，Wordsworth の「創造過程」に類似していると言える。

4. 劇化への試み

作品を想像力作用の視点から論ずるにあたり，「茨」の構成を大きく 5 つに区分することが便利である。

(1) 茨とその周辺の描写
(2) Martha Ray の悲話
(3) 語り手の茨の周辺における Martha Ray 体験
(4) Martha Ray の悲劇についての村人たちの多様な見解

(5) 語り手の茨と Martha Ray に対する現在の見解

(1) 詩人は茨の木を初め客観的に精密に描写している。James A. W. Heffernan の言葉を借りると "sharp detail" で，まるで "a camera in perfect focus"[15] のような写実的な描写である。しかし語り手は想像力を駆使し，茨の木に子供と年老いた人間の姿を暗示させながら，自然の残酷な生存競争劇を描写していく。茨の木は，生命力旺盛な樹木と異なり，"lichens" がはびこり，朽ちゆく十字架を思わせるように見捨てられた孤独な姿で立っている。

There is a thorn; it looks so old,
In truth you'd find it hard to say,
How it could ever have been young,
It looks so old and grey.
Not higher than a two-year's child,
It stands erect this aged thorn;
No leaves it has, no thorny points;
It is a mass of knotted joints,
A wretched thing forlorn.
It stands erect, and like a stone
With lichens it is overgrown. (I 連)

一本の茨がある，とても年老いて見える，
この茨にはかつて若い時があったのかと
実際言えないほどである，
とても老いていて灰色に見える。
二歳の幼児よりも身の丈は低く，
この年老いた茨は真っ直ぐに立っている。
葉もなく，とげもない。
全て枝は節くれだち，
惨めな見捨てられた姿。
真っ直ぐ立ち，石のように
苔でおおわれている。

語り手は，「イメージを変える能力」の imagination を働かせ，一本の茨の木を苔でおおわれた石のイメージに変容している。続いて茨の木の描写から "pond" と "A beauteous heap, a hill of moss" へと移動していく。塚に生えている "vermilion dye" と "scarlet bright" の苔は，後で触れることになる Martha Ray のマントの赤い色と関係があるだけでなく，亡くなった子供の血の色とも関係があると思える。つまり語り手は，惨めな茨の木を中心にあたりの光景を細かく描き，自然の背後にある悲劇的な出来事が隠されていることを暗示している。

(2) 語り手の想像力は，茨の木の背後に，「緋の衣」"a scalet cloak" を着た女性の姿をとらえる。赤い色は，血や罪を暗示する色であり，この女の身の上には血で塗られた罪の重荷が

あることを感じさせる。語り手は，女の名前を Martha Ray と明記し，Stephen Hill との愛，見捨てられた苦悩と絶望，彼との間に身ごもった子供への愛情，出産への不安と狂気，自然に救済を求める狂える魂の悲惨さが，バラッドの語り手を思わせるように，淡々と客観的に語られている。しかしXⅢ連の最後の2行で，残酷な父親を呪う言葉には，激しい怒りが主観的な響きとなって発せられている。Martha Ray のこの悲話には，詩人 Wordsworth がフランス滞在時に体験した Annette Vallon と Caroline との悲惨な思い出が感じられるし，散歩に同行した Basil への深い愛情が関与しているかも知れない。

(3) 語り手が茨周辺における Martha Ray に偶然出会う体験こそ，純粋な詩的体験であり，これを中核として詩が形成されていく。語り手が初めてこの山村へ来たとき，彼はまだ Martha Ray の名前を知らなかった。ある日望遠鏡をたずさえて，明るく広がる海を見ようとこの山の頂上に登ってみた。その時嵐がやってきて，膝から上は何も見えなかったのである。

'Twas mist and rain, and storm and rain,
No screen, no fence could I discover,
And then the wind ! in faith, it was
A wind full ten times over.
I looked around, I thought I saw
A jutting crag, and off I ran,
Head-foremost, through the driving rain,
The shelter of the crag to gain,
And, as I am a man,
Instead of jutting crag, I found
A woman seated on the ground. (XⅧ連)

霧雨はやがて嵐となり，
身を隠すところは見つからなかった，
それから風が起った，その風は
普通の風の十倍も強かった。
私はあたりを見まわし，
突き出た岩が見えたと思い走っていった。
岩の陰に隠れようとして
激しく降りしきる雨の中をまっしぐらに走った，
本当に突き出た岩の代わりに，
私が目にしたのは
地べたに坐っていた女だった。

語り手は，黙って立ったまま，その女の顔を見たが，二度と見たくない形相だったのである。この場面は，見知らぬ土地へやってきた語り手の体験を主観的な視点で語る典型的な箇所である。激しい風雨の中で語り手が見たものは，突き出た岩の代わりに地べたに坐った女であり，恐しい形相し奇妙な泣き声を上げる。彼は想像力を用いてイメージを見事に変容させ，岩→女

→恐しい形相→奇妙な泣き声へと固い物体を音へと移し変えている。さらにその泣き声は，激しい雨と共鳴し四方へ拡散していく。ここは日常の生活とはかけ離れたいわゆる異界であると言えよう。茂木健氏は，『バラッドの世界』で，農民の周辺社会には異質な世界があったことを次のように述べている。

> 隅々まで知悉した世界であり守るべき家族が住む自分の家と，その家が属する地域共同体。そしてその外側には，得体の知れないフェアリーたちが跋扈する，森に代表される不気味な異界が広がっていた。人びとはこのふたつを厳密に区別して捉え，異界と妥協しつつ明確な境界を設ける意味で，垣根を共同体と森の境目に巡らせた。この異界との境界線がもっていた意味は，永く人びとの記憶に残った。イングランドとスコットランドでは，名前をつけられる前に死んだ赤ん坊が埋められたのは垣根のそばである。(16)

語り手ははからずもこの異界に入り込み，狂乱の女の恐しい形相を直視した。ここは Martha Ray が身ごもり，悩み苦しんだあげく，赤子を殺害し，そのために赤子は神のみもとへ行けずに，あたりをさまよっている。つまり，神の洗礼を受けない子供は，村の教会墓地に葬ることが許されず，山野に葬られる結果，うかばれない霊となっているのである。Martha Ray が茨の木の近くへ行って，“O misery ! oh misery !” と叫ぶのは，そこが愛する子供が眠っているところであり，子供と語り殺害の罪をわびるだけでなく，村人から離れて自然の優しい愛にいだかれ，傷ついた狂える魂に平静と生きる力を得る神聖な霊的交流の場である。この異界において，Martha Ray と赤子は，月や星の輝く広大な宇宙空間の中で，神秘的な魂と魂の交感の体験を行うのである。そしてこの異界の空間は，詩人の詩心をとらえ，詩創造への強い情熱を生み出すのである。そこには，荒狂う自然と穏やかな自然，暗い大気の漂う幻想的な世界と明るい大気が満ちあふれる清澄な世界があり，宇宙の流転の中で想像力により，暗いきびしい自然は優しい穏和な自然へと徐々に変容されていく。これが詩人 Wordsworth の詩魂の原郷であり，詩創造の原理でもあったと言えるであろう。

(4) 語り手は，想像力を働かせて，村人たちの Martha Ray に対する様々な憶測を述べている。ある人は，女が茨の木に赤ん坊を吊るしたと語る（11. 214－5）。ある者は，茨の木の少し先にある池で溺らせたと言う（1. 216）。ある者は，赤ん坊が苔の塚に埋められたと述べる（11. 219－20及び11. 241－2）。池へ行って見つめていると，赤子の影が映っていて，赤子の姿と顔が見え，水に映る顔がこちらを見返すという人もいる（11. 225－9）。

これらの村人たちの言葉から，いかに迷信が，村人たちの心をとらえ左右し，彼らの心を不安や恐怖や好奇心へと駆り立てていることが理解される。そのために Martha Ray は，狂人としての烙印を押され，小さな社会の中で忌み嫌われ疎外された存在となっている。彼女にとって異界こそが，狂気の精神を解き放せる唯一の避難所であった。

(5) 語り手は最終連においてこう歌っている。私には事の真相はわからないが，茨の木に重い苔の房がからまり，大地に引きずり下ろそうとしているのは明白なことである。私がはっきり知っているのは，Martha Ray が山に登っているとき，昼にあるいは静かな真夜中に，彼女の泣き声が何度も聞こえたことである。Stephen Parish は，語り手が Martha Ray の姿を見たことを否定している。しかし語り手の想像性に富む語りから，彼は恐しい形相の彼女を目にしたことは事実であるし，そのために彼女の泣き声を何度も聞くことになる。語り手は，自

からに明されたMartha Rayの不思議な体験を，想像力を駆使して劇的に語ることにより，作品に印象深い効果を生み出し，聞き手や読者に喜びや恐れを体験させることになる。

5. おわりに

Wordsworthは，嬰児殺しのバラッドを本歌として，語り手を登場させ，茨の木とMartha Rayとの有機的な関連性を語ることにより，語り手の意識の深層と農村文化の基層にまつわる迷信の意味を知り，科学的認識では解決されない不可思議な心的現象，迷信の与える深い謎を自から体験していると読むことはできる。しかし語り手の想像力の視点から読むとき，想像力は嵐にゆれる茨の木の背後に，Martha Rayの悲劇的な姿をとらえ，彼女の狂気と殺害の謎を追求していく。この原始的で本能的な体験は，Wordsworthが幼い時から経験している神秘的な体験と同じものである。Wordsworthのこの霊的神秘的体験は，ある異様な気配を直覚的に感知することであり，客観的分析によって真実の姿を明示するものではない。茨の語り手もこの怪しい気配を鋭く感知し，それをParishが主張する劇的独白[17]とは異なる実験的な劇的手法を用いて表現しようと努めている。Wordsworthは，劇化を模索しつつも，R. Langbaumが述べるように，「劇的独白の形式のきわをさまよっている[18]」のである。彼は詩創造において，自然の謎めいた怪しい気配の持つ力と明るく透明な清澄の気を感知している。詩人の詩魂の磁場において，暗い霊的な力と明るい霊的な力が流動し，渦巻きながら螺旋状の運動をし，開かれた巨大な宇宙空間へと拡散していく。Wordsworthは，迷信深い語り手を登場させ彼を想像力の創造的作用の担い手として用い，作品の劇化を志行しながら迷信の持つ戦慄的な喜びを呈示したかったのである。

（1998年度・1999年度北星学園大学特別研究費による研究）

［注］

（1）Albert S. Gērard, "Of Trees and Men: The Unity of Wordsworth's *The Thorm,*" *Essays in Criticism*, 14, (July 1964), pp. 237−55.

（2）Stephen Maxfield Parish, "The Thorn" : Wordsworth's Dramatic Monologue in *Wordsworth* Edited by M. H. Abrams, Prentice-Hall, Inc., 1972, pp. 75−84.

（3）*The Poetical Works of William Wordsworth*, Vol. II, Edited by E. de Selincourt, Oxford, p. 514.

（4）*The English and Scottish Popular Ballads*, Vol. I, Edited by Francis James Child, New York, p. 220.

（5）藪下卓郎「バラッドにおける物語り技法」『視界』, 11, 1968年, pp. 1−17.

（6）*Dorothy Wordsworth's Journals* Edited with Notes by R. H. Blyth, The Hokuseido Press, 1980, p. 7.

（7）*The Poetical Works of William Wordsworth*, Vol. II, p. 511.

（8）Ibid., p. 383.

（9）Ibid., p. 512.

（10）*Literary Criticism of William Wordsworth*, ed. Paul M. Zall, University of Nebraska

Press, 1966, p. 40.

(11) *The Poetical Works of William Wordsworth,* p. 436.

(12) James A. W. Heffernan, *Wordsworth's Theory of Poetry,* Cornell University Press, 1969, p. 95.

(13) Ibid., p. 150.

(14) ガストン・バシュラール　宇佐見英治訳『空と夢』, 法政大学出版局, 1979年, pp. 1−2.

(15) James A. W. Heffernan, *Wordsworth's Theory of* Poetry, pp. 99.

(16) 茂木　健『バラッドの世界』, 春秋社, 1996年, p. 58.

(17) Stephen M. Parrish, "The Thorm" : Wordsworth's Dramatic Monologue, p. 76.

Parish は次のように述べている。"It would be more accurate to call it a poem, first, about a tree, and second, about a man. It was intended to be a psychological study, a poem about the way the mind works. The mind whose workings are revealed is that of the narrator, and the poem is, in effect, a dramatic monologue."「この詩は，まず第一に木についての詩，第二に人間についての詩であると呼ぶのがより正確であろう。これは一つの心理学的研究即ち，心の働き方についての詩となるように意図されたものであった。この詩は要するに，劇的独白なのである。」

(18) Robert Langbaum, *The Poetry of Experience,* The University of Chicago Press, 1985, p. 72. Langbaum は次の様に述べている。"... Wordsworth's genius is overwhelmingly visual, his visual presentations give more insight into his characters than their own utterances. This may be why Wordsworth never consciously discovered the dramatic monologue, though he is always hovering on the edge of the form."「……ワーズワスの非凡な創造的才能が圧倒的に視覚に関するものであるため，彼が視覚によって提示するのは，登場人物の発話よりも，人物の洞察である。おそらくこのことが，彼はいつも劇的独白の形式のきわをさまよっているけれども，決して意識的に劇的独白には気づいていなかったことの理由となるかも知れない。」